米欧亜回覧

第２号
編集・発行
米欧回覧の会
準備室

"いま、この大旅行に熱い視線が集まっている"

―「岩倉使節の旅」映像化で大反響―

「映像の会」白百合女子大学でも盛況！

映像「岩倉使節の世界一周旅行」の会が、昨年九月に続き十二月十六日、白百合女子大学で行なわれた。百四十名定員の会場は補助席を出すほどの大入りで、朝十時半から五時半まで延々七時間に及ぶ長丁場にもかかわらず、途中退場する人はごく少なかった。また前回同様多彩なゲストの方々から魅力あるコメントがあり最後まで熱気にあふれた。今回は「米欧回覧実記」の研究者でもある松井千恵教授のご縁で白百合女子大学での上映となったもので、女子大生や一般のビジネスマンも交じりヴァラエティに富んだ会場風景となった。

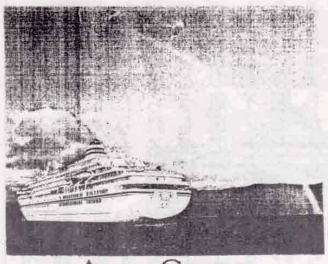
「読売新聞」夕刊一面で大々的に報道・・・

また、この模様は「読売新聞」一月九日付けの夕刊一面「トピック最前線」欄に「岩倉欧米使節団に学べ～明治初め、使命に燃え好奇心あふれる日本人がいた」の大見出しで掲載され、全国的な反響をよぶことになった。取材に当った森昭雄記者はこう報じている・・

『明治の初め、二年近く欧米諸国を視察した「岩倉使節団」。いまこの大旅行に熱い視線が集まっている。旗振り役は、二十年近く使節団を研究してきた作家・泉三郎さん。自分で歩いて旅を再現したスライド集の上映会は、ビジネスマンや研究者などであふれた。二十一世紀を目前にして、先行きが不透明な日本。世界に門戸を開いたばかりの約百二十年前と似ているのではないか。参加者たちは、この閉塞感を乗り越えるカギを、明治人の大旅行の中に見つけようとしていた。』

大西洋上の「飛鳥」でも上映決まる・・・

日本郵船の豪華客船「飛鳥」は、三月一日横浜港からいよいよ待望の世界一周クルーズ（九十六日間）に出発するが、その船上で映像「岩倉使節の世界一周旅行」が上映されることになった。泉三郎氏は同船にポルトガルのリスボンからニューヨークまで乗り込み、大西洋上で数回にわたり上映・講演することになった。



ASUKA CRUISE

今、何故、「米欧回覧実記」なのか？

泉　三郎

「特命全権大使　米欧回覧実記」（全五巻、二千二百ページ）は、「岩倉使節の旅」の記録です。それは随員の一人である久米邦武が各分野の報告書も参考にしながらまとめたもので、米欧十二ケ国の歴史地理から始まって政治経済、産業技術、商業貿易、交通運輸、教育宗教など、極めて広範囲にわたる詳細な大旅行記録なのです。

そこには異質文明に遭遇した時点の初期明治人の率直な印象が格調の高い名文によって見事に表現されております。そして日々見聞したものを驚くほどの冷静さで観察分析するとともに、その背後にある理念や思想までも鋭く洞察しており、しかも一方に偏しないバランスある見方をしているのです。

その秘密は何かといえば、まず新しい国造りのための待ったなしの切実な使命感があったことでありましょう。そしてその背後には日本の伝統が培った強靭なサムライ精神があり、文化遺産ともいうべき深い漢学的教養があったと思います。それはまた、近代の専門分化がすすむ以前の「全人的把握」が可能な時代であったことをも意味します。

翻っていま我々は情報の洪水の中でアップアップしながら「木を見て森を見ない」状況にあります。そして軟弱な精神は未だに欧米文明への劣等感から脱却できず、部分にこだわって一方に偏する欠点をもっています。われわれはこの書をひもとくとき、そこに堂々たる独立の気概と曇りのない目と全人的なバランス感覚を発見して驚くのです。戦後五十一年、明治維新以来百二十数年の節目にある今日だからこそ、この書は我々に必ずや勇気を与え、多くのことを示唆してくれるものと信じます。

"もっと多くの人にみせたい"

「映像の会」でのコメントから

今回の白百合女子大学でも参加者の方々から貴重なコメントが寄せられたので、その要旨をお伝えしたい。

アメリカ編

「ヒラデルヒヤ」ノ独立会堂

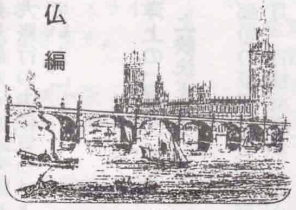
まず参議院議員の小島慶三氏からコメントをいただいた。小島氏は通産省の審議官を勤められたり実業界や教育界でも活躍された多角的なキャリアの持ち主で、泉三郎氏とは「岩倉使節」に関する最初の著作である「明治四年のアンバッサドル」の書評を担当されて以来のご縁である。

「私はもともと維新以来の歴史に大変興味をもっていますが、日本の近代化を考える上でやはりそのスタートがこの岩倉使節の大旅行だったと思います。まだアメリカ編しかみていませんが、モルモン教が出て来たりインディアンやトムソーヤーの世界がでてきたりしていわばアメリカの歴史の原点がみられるのも楽しい。また解説が名調子で最近こんな面白い映画はちょっとみたことがない。それにしても当時の日本人は颯爽と胸をはっていた。やはり使命感の違いでしょうか。廉恥とかプライドとかが違っていたのでしょう。その点最近の政治家は弱腰で実に情けない。昔の日本人は偉かった・・・とあらためて思ってしまう。」

次いで佐々木行美氏（東京大学名誉教授）がたたれた。司法省の調査理事官として派遣された佐々木高行のご子孫である。

「先ほどから保守頑固党ということで何回も映像に出て来た佐々木高行の三代目です。高行はサクラメントで食事にありつけなくて激怒する場面があったり、詐欺にあってウイーンの宿で支払い不能になりホテルに人質同様の扱いで缶詰にされたりして、どうも旅の印象は余りよくなかったらしい。高行は保守一辺倒のイメージがあるようですが実際には工部卿として鉄道建設に尽力したり鹿鳴館で仮装舞踏会に出たりもしています。歴史に語られるイメージと実像とはどうも乖離があるようで盟友の竜馬についても武骨といったイメージでしょうが身内から聞くところではむしろ女とまちがえられるようなななよしたところがあったといいます。高行は晩年明治天皇の側近として仕え好々翁といわれていたのですが、亡くなったあとみてみたら"キセルの吸い口をかみつぶしていた"そうで最後まで癇癪はなおらなかったようです・・」

英仏編



「ウェストミニステル」橋ノ巴方門

平川祐弘先生（東京大学名誉教授）は名著の評判が高い「西洋の衝撃と日本」や「和魂洋才の系譜」などのご著書があり比較文化がご専門ですが、北京大学での講義の印象から説き起こされた。

「十九世紀に同じように西洋の衝撃を受けて、どうして中国と日本ではその反応が違ったのか。日本には"文明は海を渡ってくる"というイメージがあり海外から帰って来た留学生を大事にするが、中国では中華思想のために"尊外卑内"ではなくその逆であり、その上科挙の試験をパスしていないと出世できないこともあって、海外で学んで来たものを大事にしない、そこが日本と大いに違う。中国で岩倉使節の"米欧回覧"に相当するものがあるとすれば鄧小平が一九七九年にアメリカを回覧したものがそれにあたるのではないか。彼の場合二ケ月しかいられなかったが、日本の場合は新政府のベターハーフが二年近く留守にしてクーデターが起きなかったというのだから、いかに政治が安定していたかの証拠だと思います。

ただ海外に学ぶ姿勢はいいとして、西洋のものならなんでもいいと思うのは間違いで、例えばアメリカで女性解放を叫ぶから日本も認めろというのはおかしい、同時にアメリカの家庭崩壊もみなくてはいけない。その点、「米欧回覧実記」のいいのはバランスがとれていることです。例えばロンドンで貧民窟もちゃんとみている。ある一面だけをみて向こうがいい、いいといっているのはよろしくない。やはり三点測量が必要だと思います・・・」

使節一行にとって「奇異」に思えたことの一つがダンスだった。アメリカでの舞踏風景。

次いで、中川浩一氏（茨城大学教授：地理学史）がたたれた。先生は「観光の文化史」や「旅の文化史」などの著書がありとりわけ旅や乗り物にお詳しい。

「祖父が明治初年にフランスに留学していたことがありその追跡調査をしているうちに岩倉使節にめぐりあったのです。最近『流通経済大学』で観光地理の講座を持つことになったのですが、そこでまず岩倉使節の横浜出港の画をみせて、"観光"というのは

本来は今のような消費一方の退廃的なものじゃないんだよ、岩倉使節の場合、新しい国家をつくるための使命感に溢れて観光したんだよ、みんなもそれをよく覚えておきなさいと教えています・・・」

欧州編

ピョートル大帝像（ペテルスブルク）

帝京大学の石田寿朗教授は国際経済論、経済政策がご専門で「世界の新秩序」などスケールの大きな政策論を展開されている。

「今日の映像は実に系統的に写真や資料をお集めになり解説もきわめて実証的でありディレッタントの域を超えた立派なお仕事だと敬意を表します。これだけの映像を一日かけてみせてもらったからには何か思わないわけにはいかない・・。まず第一に明治人の気概と現代人のそれの余りの落差に驚きます。当時の日本人は実に毅然としている。外交団の地位についても最下位にありカルチュラルショックも激しいはずなのに、堂々と対応している、それが実に印象的でした。

翻って最近の日本人はどうか。経済は世界の最高水準、外交団の地位もトップレベル、ジュネーブの国連軍縮大使の場合、牛が放牧できるようなものすごい大きな屋敷に住んでいる。しかしその割りに仕事といえばなんにもしていない。またこの八月にマクナマラ（米国の元国防長官）とあったので突っ込んだ話をした。そこで沖縄における米国の軍事戦略について基地を縮小すべきだと直言したら、意外にもマクナマラが〝その通りだ、私もそう思う〟というんですね。ところが〝あなたはそういうが、日本の責任ある地位にいる人からそんなことは一度も聞いたことがない。金をだすからどうぞ居てくれというばかりだ〟という訳です。事ほど左様に国力は増大し地位も上がったのに、人間の方は反対に矮小になってしまった。どうしたことでしょうか、これをみると人間はむしろ明治に回帰した方がいいのではないか、と思ってしまいます・・」

「米欧回覧実記」の研究者でもある北海道大学名誉教授の高田誠二先生は、物理がご専門なのに「実記」にのめりこんでしまった理由を披露され、みなさんをもこの魅力ある世界に巻き込んでしまいたいとユーモラスに語られた。

「とにかく〝実記〟というのがエンサイクロペディア的な書物なので、研究をしていく過程で自然にいろいろの分野の人と知合いになり交際範囲がひろがっていく、それが実に楽しい。それからまた〝間違いを捜す楽しみ〟もある。あの博学の久米邦武にも沢山間違いがあるし、その後の研究者、田中彰教授にも、泉さんにもある訳で、それを探すのがまた楽しい・・・」

維納万国博覧会ノ中堂

共同通信の論説委員兼編集委員の西内昌彦さんは率直な感想を語って拍手を浴びた。

「今日は実は他にゴルフと講演会と二つの予約があったのですが、そちらをキャンセルしてやってきて本当によかった。そして映像を見、コメントを聞いてみて、みなさんがこの旅にのめりこんでいく理由がよくわかりました。それからこれだけの内容のものをわれわれだけでみているのはもったいない、なるべく多くの人、とくに若い人そして途上国の人にもみせたい。そういうような機会ができればいいなと思います・・」

産能短期大学教授の吉田昭彦氏は〝生物物理〟が専門の医学博士で、バイオから入ってグローバルに農業、環境問題にコミットし積極的に発言もされている。

「近代の科学技術文明、物質文明が行き詰まってきたという認識のもとに東洋と西洋の思想の違い、特に東洋の考えに関心をもって、岡倉天心や南方熊楠に注目してきたのですが、岩倉使節のことを知ってもっと見なければならなくてはいけないのはこの〝米欧回覧の旅〟ではないのかと気がついたのです。二十一世紀に向けて人類の存続をかけて考えていかなくてはいけない今、大変いい研究素材をいただいたと嬉しく思います・・・」

石坂芳男氏（トヨタ自動車取締役）は米国並びに欧州担当であっただけにビジネス最前線の体験をふまえ「日本人の国際性を考えた場合、百二十年前にこんな素晴しい教材があったのにどうしてそれを生かしてこれなかったのかと残念に思う。やはり日本はモノカルチャーの国だからということだろうか・・その意味でもこの映像が全国各地で上映されることを希望します・・・」と述べられた。

最後に西井正臣氏（エッソ石油代表取締役専務）が立たれ、その外資系企業における貴重な経験から次ぎのように語られた。「日本人は世界的な立場の中ではなかなか堂々とやれない。ところがこの岩倉使節一行は堂々と振舞っている・・・そこに非常な感銘を受けた。こういう立派な日本人がいたということをもっと若い人たち特に二十代の人に知らせる必要がある。是非これからも方々の学校でやっていただきたい・・・」

（以上　発言順）

文責　小田八郎）

岩倉使節の世界一周旅行

（映像スライドのご案内）

第一部　＜米国編＞
- １巻　横浜出帆からサンフランシスコまで
- ２巻　大陸横断・汽車の旅
- ３巻　ワシントン滞在と東部回覧

第二部　＜英仏編＞
- ４巻　全盛期の大英帝国を往く
- ５巻　英国社会の光と影
- ６巻　麗部パリは天宮の如し

第三部　＜欧州編＞
- ７巻　二つの小国と新興ドイツ
- ８巻　大国ロシアとスカンディナビア諸国
- ９巻　アルプスの南へ、そして帰国

※各巻はスライドコマ数75～80枚で、ナレーションはテープに録音されており、オートスライドで約30分で映写できます。

※なお現在ダイジェスト版「米欧回覧の旅」を制作中（約90分）
- 第１巻　米国編
- 第２巻　英仏編
- 第３巻　欧州編

（各巻約30分）

お問い合せ先　「米欧回覧の会」
- 東京都中央区銀座６－４－８　飯島ビル２号館　７階　ギャラリー田川　TEL　03-3574-6633
- 東京都八王子市元横山町１-14-16　イズミ・オフィス　TEL・FAX　0426-46-4513　ミササ・オフィス　TEL・0426-46-1949

『米欧回覧の会』

今後のスケジュール

「米欧回覧の会」準備室では、いよいよ４月設立を目処に同好の方々に第一回の呼びかけを行なうことになりました。同封の案内をご覧いただき、趣旨にご賛同の方は申し込み書をお送り下さい。

なお、今後の活動内容について現在決っているもの及び予定のものをお知らせいたします。

＊　都民カレッジの講座：10回（１月12日～３月22日）
都立大学　南大沢キャンパス　講師：泉三郎
「岩倉使節の群像～旅は何をもたらしたか」
（なお、この講座は既に締め切っております）

＊　映像"米欧回覧の旅"（ダイジェスト版）試写会
- 日時　４月６日(土)　午後６時～９時
- 場所　国際文化会館ホール
- 定員　80名（定員になり次第締切ます）
- 会費　3,０００円（食事代含む）

＊　「飛鳥」洋上セミナー
- 日時　４月20日～28日
- 場所　大西洋上"飛鳥"シアター

＊　歴史ツアー「米欧回覧の旅」シリーズ
- 新シリーズについて
「岩倉使節の足跡を訪ねる旅」シリーズは、泉三郎氏のコーディネイトにより過去３年間にわたり６回に分けて行なわれ、そのメインルートを辿り終えました。そこで今年からは新しい企画でスタートすることになりました。新シリーズの特色の一つは、これまでと違ってあまりルートの順序にこだわらず「"米欧回覧実記"を現地で読む旅」とし、魅力的なコースをアトランダムにセレクトすること。二つはこれまでの旅は「岩倉使節」に準じて大名旅行の雰囲気がありましたが、新企画では贅沢な部分はなるべく省いてスリムな旅とし経費をできるだけ抑えるようにしたことです。
- 第１回は"米国東部周遊の旅"11日間＜６月＞
- 第２回は"以太利とドナウの旅"10日間＜10月＞
（費用はいずれも４３８,０００円です）
- お問い合わせは日通旅行（渋谷支店）へどうぞ・・・
電話は　０３－３４７６－７７８３　担当　岡部・森です。

＊　サロンセミナー「"米欧回覧実記"を読む」シリーズ
７月ごろから月１回の予定、詳しくは次号でお知らせします。

＊編集後記

第二回「映像の会」も予想以上に多勢の人に観ていただけることになった。九巻一挙上映というロングランであったにもかかわらず、中途でお帰りの方は少なく、終了後の懇親会にも多数の方々が参加され、様々なご感想や、数々の有益なご助言をいただけたのは有難かった。前回同様、この「映像」はもっと多くの、特に若い人に是非見せたいというご要望は多く、またそのためには実質四時間半の一挙上映は如何にも長過ぎる、もっと短縮する工夫をして欲しいというご提言は、今回も半ばを超えた。

広範、膨大な旅行の内容をさらに短縮することは至難なことではあるが、ご提言に従ってその作業がすすめられており、より多くの人に観て頂く日は近いと期待される。

（発起人代表）山本季司　浅沼晴男・田川信人